
深海魚の恋

夕凧遊子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深海魚の恋

【Nコード】

N9624G

【作者名】

夕風遊子

【あらすじ】

ここは海の底に沈む町。必要なくなつた目は退化して何も見えなくなり、冷たい水で満たされた肺はその機能を果たさず、暗い水底で、溺れながら必死にもがいて、それでも、本能が君を求めるそれでも、本能で君を欲するもう恋という名の淡い光は、ずっと昔に砂底に埋めたはずなのに。（そんな深海魚のような恋のお話たち）

心臓の有効期限

今日は日曜日、

バイトもなければ、約束もない、レポートも課題も昨日終わらせた。こんな穏やかな休日。まさに天国、楽園。ああ俺のエデン、取り合えず一日中なにもしないで寝てやろうと思った。計画は順調だ、その証拠に俺は最近実家から送られてきたマイソファーにこうして丸まってすでに半日が経っている。ああなんとという優雅な一日、毎日こうでいいのになあ、いやでも毎日こうしていると流石に頭が腐りそう。そんなくだらない思考ばかりが脳内で行き交う中、本日何度目かのまどろみが訪れた。この誘いに導かれていけばその先にあるのは夢の世界。段々と薄れていく意識の中、現実世界とおさらばしようとした。しようとした矢先に。どしり、と俺の体の足のふくらはぎに尋常じゃない重みを感じる。

「あ。起きた」

状況確認がため、自分のまだ眠い目蓋に鞭打って目をあけると、そこには半馬乗りの状態で平然とそんなことをいう、変人、曲がりなりに俺と5年も付き合いのある友人だ、が居た。

「…何してんの」

「あ…気にしない、気にしない」

ごゆっくりどうぞ、の意味合いで奴に微笑まれるが、この状況でそのセリフはあまりにも場違い、空気よめてない、というものだ。まず会話が成り立ってない。当たり前にごゆっくりなぞやってられない俺はこの状況を打破するがべく肘をソファにつき上半身を起こそうとした。そしたら

「うー！このー！」

なんだかすごい慌てた声と共に肩をぐつと押さえつけられ、重力に従って俺と、ソイツはソファーに倒れ込む。そして不運な事にその拍子に俺はソファーの骨に後頭部を打つはめになった。あまりにも理不尽な事実急に怒りが込み上げる。

「なんだよ意味わかんねえよまじふっざけんなよ！」

今この場で思いつく限りの罵倒を試みたが、肝心のあはは俺の胸らへんにへたり込んでからピクリとも動きはしない。ここからの視点じゃ奴の旋毛しか見えず、ミルクティーブラウンの髪色が時折反射してまぶしい。急激に込み上げてきた怒りはそれと同じくらいのスピードで醒めていく。俺は奴と交信をとることは潔く諦めることにして、取り合えず、さつき打った後頭部の痛みが込み上げてきたので、腕をあげ、手でふれ自分の頭の無事を確認する。すると少し腫れ気味のたんこぶがあった。いてえ。

「んー64か。うん。よし」

数分が経ったところで、もぞもぞと奴が動いたかと思えば独り言を吐いて、顔を上げて此方を見る。その眩きにこいつが何をしていたかがやっとわかる。多分俺の脈を測っていたのだ。しかし、やってきたことが分かってても奴の真意は全く姿を見せない。一体なんなんだよ、不毛な疑問だけが残る。そんな考えが自然に表情にでてしまつたらしい、奴が俺の顔を見て口の端をあげさぞ嬉しそうに言う。

「俺、90だったから、丁度いいよね。」

「だから、趣旨をいえ。趣旨を。」

肘を突き、上半身を起こしながら訊ねると、奴は物理的に俺に凭れかかる形になりながらどう答えるべきかを考え唸る。本当頭弱いな、と感想を抱くが、このアホが某国立有名大学に通ってることを思い出し、俺は溜息を付いた。そうして溜息を付く間に俺のほう gaze が先にひらめく。

「あーもしかしてあれか、昨日のテレビの…」

「っそ！それ！番組名思い出せないけどそれ！」

残念ながら俺もチャンネルを回していて偶然その部分を見ただけなので番組名は流石に知らなかったが、相手の反応からするとドンピシャだ。脳内に昨日の映像がよみがえる、何やら体のミステリーを解き明かす、というよくある、人体解剖番組でヒトの寿命についてナレーションが賢明にその仕組みを説明していた。ある学説によると、人間の心臓は生まれたときから一生に心臓を動かす回数が決まっている、という。奴もこれを見たのだろう、そして今日、俺の脈を確かめるためにわざわざ俺の華麗なる休日をぶち壊しに来たわけだ。

全貌が明らかになった途端、これまでの自分の不運の数々に泣けてきた。おれの安静なる睡眠を返せ、このやろう。

そんな俺の恨みを知るはずもないアホはまだ頬を緩ませてニヤニヤしていた。

俺は奴の行動のメカニズムを解き明かしたが、その目的はいまだ不明だ。

「で、何か研究結果は出ましたかね？」

幾分か、嫌味も込めて奴に尋ねた。

「はい、出ました。」

すると、ニヤつきを抑えられてない中途半端なマジメ顔から、少しだけ声のトーンを低くした答えがかえってくる。

「俺は、君より先に死ぬそうですね。」

そういった奴は先程の作りマジメ顔は完全に崩れおり、満面の笑みを浮かべていた。

そんな奴の完璧笑顔に俺の先程、収まったはずの腹の虫が騒ぎ立ただす。手を伸ばし、そのむかつきを擦り付けるようにして、頭をかきなでてやる。何がそんなに嬉しいんだよ。さすが天才さまさまだな、俺には全くわかんねーよ。そんな類いの文句を延々といつていと、頭を好きなようにぐしゃぐしゃにされながら奴は「ははっ」などと心底嬉しげに声を上げて小さく笑った。

本当、何もわかつちゃくれないし、何も分かり合えない。天才と凡人とはここまで違うものなのか、と俺は今日も苦悩させられる。

何も、わかつちゃくれない。お前が俺より先に死んだら、お前はいいかもしれないけど俺はどうなんだよ。お前は俺がどうなったっていいんだな？ ああいいんだな？ そうだよな、お前はいつだって俺の事なんかどうでもいいんだよなあ。昨日だって、10枚分のレポートをやつとの思いで手伝って終わらしてやったのに、てめえは先に寝てるし、あの時はまじで殴りたくなかった。というか本気で殴った。

今日だって、と回想しながらおもむろに後頭部に手を当ててみるとさっきソファで強打させられた部分がジンジンと痛む。

ついに俺の怒りは沸騰点を越え、目の前のへらへらしたアホ面を撫

でていたその手でそのアホ面に鷲掴みにし、ソファからフローリングへと突き落とす。

「ぎゃ」と全くふざけた声を漏らしながら倒れていく奴の顔は、相変わらず笑っていた。

鬼っっっ、っっっ

ふとした日常に潜んだドラマチックなど、全然綺麗じゃない。そんなのはむしろ障害と呼ぶべきなのだ。少なくとも俺にとってはそう
だ。ドラマチック、一発逆転、そんな危なげな事ばかりが転がって
る人生などに興味ない。日常は日常であるべきで、そこは平坦な道
のりが続いてればよかった。よかったのに。

長い廊下がずっと続く幻想に囚われそうになる。

こうして息を切らして走って、時計の三分の一が過ぎた。

もう十の昔に体力や気力など切らしてしまっている俺は、地球の重
力に逆らえずに失速していく。逃げなければ、と気持ち焦ってい
ても、足がついていかない。

逃げなければ、確実に掴まる。

捕まえられてしまえば、俺は。（その先など考えたくもない。）

とにかく、走って、走って、走って、遠いどこかに。

出来ればあのヒトのいない世界に。

あのヒトが存在しない日常に。

「ゲームオーバー、つかまえた。」

遅かった。気が付けば、意識が飛んでる間に俺の右手首はがっちり
捕らえられてしまっていた。

息を切らしながらも、賢明に腕を振り解こうと上下に力を入れるが、
がっしりと掴まれた相手の手は解かれる気配がない。そのことによ
って、抗う気力さえなくなり、大人しく力を抜くと、自然に相手の

手も外れる。しかし、その場から逃げようとは思えなかった。否、思えなかったのではない、相手のダークブルーの目がさきから俺を捕まえて、それを許そうとはしない。逃げる事などこの期に及んで無理な話だった。

「…んで、俺なの。おっかけてこないでつつたよ。バカなの？」

窓の外は、赤く夕暮れ。どこかのバカが「鬼ごっこをしよう」など提案しなければ俺は今ごろ帰り道で気持ちよく鼻歌などうたいながら今晚のおかずを想像してお腹を減らしていただろうに。

絵の具の赤を薄めた水のような透明な光が男の漆黒の髪さえも赤く反射させる。その反射光を眺めながら、ああ綺麗だな、などと呑気に思っていると、テノールの声色が深刻に俺に語りかける。

「バカはお前っしょ。俺の言った事もう忘れてる」

その声色はどこか重たいくせに、夕日に照らされた嫌に整った顔は、静かに、穏やかに、その表情は酷く柔らかくて、俺の目を捉えて離さない。

「そんなのは、知らない」

酷く、優しい感触にふいに泣きそうになって、急いで耳を塞ぐ。

「うそつけ。知らないはずない」

塞いだはずの耳に変らずテノールが滑り込んでくる。たまらず俺は目も閉じる。

「知らない聞いてない聞きたくない」

「その最後のが本音だな？」

「・・・」

「わかりやす」

閉じてしまいそうな声帯をやつとのことと振り絞った言葉は、ことごとく奴に吸い込まれてしまう。拒絶しようにも、どんなに剣の切っ先を向けたとしても、その柔軟さに衝撃を吸収されてしまつては、拒絶のしようがない。まさにそんな感覚に陥るような気分だった。

暫くの静寂の中、長い廊下にいると外から部活動生のハツラツとした声が木霊して、変に心地よい空間を作り出す。しかし、時折聞こえる息遣いに怯えながら、俺はこのまま空気となつて消えてしまえたらどれだけいいだろうか、などとそんな空言を考える。

ふと、静寂のゆるる気配がして、俯いていた顔を上げてみると、太くしなやかな奴の指先が俺の痛んだ髪を摘むのがわかった。それを皮切りに、俺の中の塞き止められていた感情が溢れ出す。

「ばかだ。ホンモノのばかだ」

「いいよ、もうバカでも」

「じゃあしねばか」

「はいはいしにません」

濁流は、そのままだみ声として俺の口から罵倒と共に流れ出す。中身の無い、言葉を吐き下して、目の前の彼に叩きつける。

しかし、そいつはダメージを受けるどころか、さきより、もっと優しさを増した声色で俺を包む。最後の言葉なんか、バカみたいに笑いながら、適当に返事されてしまった。なんかもう、ほんとうにむかつく。

「…んで、俺なの。他に…いんじゃん」

「残念ながら、他にいないんだよな、これが」

気を抜けば、目から零れてきそうな水分を相手に気付かれないように手で救い上げながら、精一杯の強がり張った声で文句を言いつける。しかし、どんなに俺の口調が厳しくなっても、目の前の黒髪は穏やかにそんなことを、平然と言つてのける。優しくされることに慣れてない俺は、戸惑うより他がない。

「っそばっか！いんだろいくらでも」

「いないいない。つか居たとしてもいらね」

うるたえて、また声を張り上げるも、余裕をかましながらいつも通りの口調で会話をするお前に俺は怒る事も、責める事にも段々と疲れくる。こいつには言つても敵わない。今回改めて感じてみるが、どうしたことが、こいつの性格上そんなことは当の昔に存分に承知していたはず。

だけど、逃げたかった。逃げていないと、走り続けていないと、俺のこの貧弱な足はすぐに誰かの腕を求めてしまっただろうから。

「俺は、嫌だ」

「知ってるし」

夕暮れの明かりは、そろそろ色を変えようとしていた。空にはすぐそこに一番星とオレンジと溶け出して紺色が混ざってきている。窓の四角い形が映し出された廊下のそこをぼっつと眺めながら、俺は最後の悪あがきをする。

「サイテーな」

「それもしつてる」

でも、どれだけ逃げても、どれだけ足掻いても、この男はいつも笑って俺を許す。

「ばかしね」

「はいはい」

あきれ返った奴の声とともに、眼前にあった手が俺の頭を子供をいやすような手つきで2回叩き、おろされる。

なんだよ、俺はもう子供じゃねえよ。沈黙の中、不毛な感情が湧きあがる。だけど、今日は、不思議とその後に残った心地よかった。

無機質な廊下の光沢から目をはなして、そのダークブルーを探す。

そして視界に見つけたその色は、

まるで夜の静かな大海原のようだとおもった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9624g/>

深海魚の恋

2010年10月21日23時59分発行